

< 学術論文 >

関係構築の「橋渡し」としての複言語サポーター

—インタビュー調査から—

徳井厚子 信州大学教育学部教育科学講座

キーワード：橋渡し，複言語サポーター，インタビュー，複言語・複文化主義

1. はじめに

現在、日本においても国境を越えて移動する人々が増え、多様な外国人支援の在り方が求められている。このような状況の中で地域や学校等で外国人の支援を行っている複言語サポーター（ここでは本人自身が外国にルーツを持つ日本語のノンネイティブスピーカーで、複数の言語を状況や文脈に応じて駆使しながら外国籍住民をサポートしている支援者を指すこととする）は重要な役割を果たしていると考えられる。しかし、これまで複言語サポーターの実態についてはほとんど研究対象として光が当ててこられなかった。

日本国内における複言語サポーターについての研究は、これまでいくつかなされてきている。晏（2010, pp. 90-92）は、外国人職員という当事者としての経験から、多文化共生事業における外国人職員の役割を考察し、当事者の母語以外にも多様な言語の対応が求められたり、外国人職員の役割が生活の様々な面にわたり相談が寄せられる等、外国人職員の役割が期待していたよりも実際は多様であることを報告している。また、晏（2010, p. 92）は、「講師と職員の間にいると両方に通訳やコーディネーションが期待されることが多い」とし、「そこで意識的に通訳を行わなかったり席をはずしたりして双方が直接会話できる場を意識している」としている。晏は、当事者間が直接会話ができるよう、側面からサポートする役割を意識しているといえる。また、金井（2010, p. 173）は、地域日本語教室における学習活動のデータの分析を行い、日本語非母語話者ボランティアの働きかけにより学習者が母語で認知面、社会面に加えて経験を語ることができたとしている。また、山本（2011, p. 99）はインタビューやアンケートのデータから職場での国際交流員と担当者間の関係を考察し、国際交流員の組織における位置づけについては、契約団体が国際交流員に求める役割が反映されているとしている。具体的には、「他の職員と同等扱い」「お客様扱い」「協働者」のいずれとして認知するかにより、職場における関係に違いが生じているとしている。これらの研究から、複言語サポーターは複数の言語を駆使しながら多様な役割を担っていることが明らかにされているといえる。このように複言語サポーターの役割についての研究は複数みられるが、複言語サポーターがどのような役割を担いながら当事者間の関係構築の「橋渡し」を

行っているのかについての具体的な研究はほとんどみられない。

コミュニティ通訳の役割や特徴という点についてまとめたものもある。コミュニティ通訳とは、水野(2008, pp.6-7)によれば、「司法、医療、行政サービスを中心に日本で暮らしている外国人の言葉の問題に対処するための通訳者、翻訳者」のことである。水野(2008, p. 6-7)は、コミュニティ通訳の通訳範囲は会議通訳やビジネス通訳とは異なり非常に広く多岐にわたっているとしている。水野(2008, pp. 12-16)は、コミュニティ通訳の特徴として以下を挙げている。1) 地域住民を対象にする。2) (例えば医者と患者のような) 力関係に差がある。3) 言語のレベルや種類が様々である。4) 文化的要素が大きく関わる。5) 基本的人権の保護に直結している。水野は、コミュニティ通訳の特徴を挙げることによって、コミュニティ通訳が他の通訳とは異なる特徴を持つことを示唆している。また、地域ネットワークの研究では「つながり」を「ワーク」(機能) させるためのキーパーソンについて研究した野山(2003, pp.4-13) 等があるが、複言語サポーターに焦点をあて関係構築について言及したものはこれまでほとんどみられない。

本研究では、学校や地域等様々な場面で外国人の支援を行っている複言語サポーターが、複数の言語を文脈に応じて駆使しながら具体的にどのような役割を担いつつ当事者間(例えば学校の教員と保護者間)の関係構築の「橋渡し」を行っているかを、日本国内で行った複言語サポーター及び日本人コワーカーへのインタビュー調査をもとに明らかにしようとするものである。

2. 複言語・複文化主義と複言語サポーター

本稿で用いる「複言語サポーター」という名称は、欧州評議会の「複言語・複文化主義」の考えにもとづき、「pluriの想定する複合的、複層的」(西山 2010, p. 25) な側面を強調するために用いている。欧州評議会(2001, p. 4)は、複言語・複文化主義について以下のように述べている。

個々人の体験は、その文化的背景の中で広がる。(略)しかし、その際、その言語や文化を完全に切り離し心の中の別々の部屋にしまっておくわけではない。むしろそこでは新しいコミュニケーション能力が作りあげられるのであるが、その成立にはすべての言語知識と経験が寄与するし、そこでは言語同士が相互の関係を築きまた相互に作用し合っているのである。(欧州評議会, 2004, p. 4)

本稿で扱う複言語サポーターは、「本人自身が外国にルーツを持つ日本語のノンネイティブスピーカーで、複数の言語を状況や文脈に応じて駆使しながら外国籍住民をサポートしている支援者」と捉えている。特に欧州評議会の記述にある「複数の言語同士が相互の関係を築きまた相互に作用し合っている」という点に着目する。

また、欧州評議会では、言語活動について、「受容的言語活動」「産出的言語活動」「言

葉のやりとり」「仲介活動」の4つに分かれるとしている。特に仲介活動を一つの特別な活動として位置づけていることに特色があり、具体的には以下のように述べられている。

仲介活動では、言語使用者は、自分の言いたいことを表現するわけではなく、単にお互いを直接に理解できない対話間—（常にというわけではないが）通常は異なる言語の話し手—の仲介者として行動する。仲介活動には、話し言葉による通訳や書き言葉での翻訳のほかに、オリジナルのテキストが受け手に理解できない場合にそれと同じ言語で要約したり言い換えたりすることをも含む。（欧州評議会、2004, p. 91）

仲介活動は、複言語サポーターの当事者間の「橋渡し」の活動とも関わりが深いと言える。

本稿では、複言語サポーターが複数の言語同士の相互作用を通じ具体的にどのような支援をしているのかについて関係構築の「橋渡し」という観点に焦点をあて、考察する。

3. 研究概要

本稿で報告する関係構築の「橋渡し」としての複言語サポーターについての研究は、「複言語サポーターの支援における相互構築コミュニケーション」の研究の一環として行っているものである。研究全体の目的は、複言語サポーターの支援におけるコミュニケーションの実態についてインタビュー調査をもとに特に「関係構築」という観点から明らかにすることである。

研究方法は半構造化インタビューの方法で行い、支援の内容、コミュニケーション、仕事に対する思い、問題とその解決、悩み、周囲との関係、複言語サポーターの役割の可能性等を中心に一人約30分から1時間半かけて自由に語ってもらった。インタビューを行うに際し、研究成果の公表にあたっては本名を公表しないこと、本人であることが推測できる情報は記載しないこと、本人の話したくない内容を聞かれた場合は話すことを拒否することができるという条件で事前にインタビューイの許可を得た。これまで22名の複言語サポーターおよび7名の日本人コーワーカーへのインタビューを行った。インタビューは2011年6月より行っているが、2013年現在も継続中である。対象者は地域の国際交流団体や労働局等の機関や学校等で支援を行っている。本報告では、この中から当事者間の「橋渡し」をしている語りの見られた8名の複言語サポーターと2名の日本人コーワーカーの語りを取り上げ、「関係構築の橋渡しとしての複言語サポーター」という観点から考察を行う。10名の詳細については表1の通りである。

表1 複言語サポーターの性別, 出身, 支援内容

協力者	性別	出身	支援内容
O	女性	ペルー	学校での支援
D	女性	ペルー	生活支援 学校内支援
Y	女性	ブラジル	労働局, 学校での支援等
M	女性	中国	学校での支援 国際交流団体支援
S	男性	日本	教育関係機関
E	女性	ブラジル	学校での支援 国際交流団体支援
N	女性	ブラジル	生活相談
K	女性	日本	生活相談
C	女性	フィリピン	生活相談
P	女性	タイ	生活相談

4. 分析と考察

10名の語りについて、インタビューデータをもとに「関係構築の橋渡し」をどのように行っているかという分析を行った。以下ではそれぞれについてインタビューデータをもとに考察する。

4.1 当事者を「つなぐ」ための重要な役割という語り

まず、複言語サポーターは組織や専門家と当事者を「つなぐ」ための役割を果たしているという語りが見られた。

Eは、国際交流団体で生活支援を行い、相談等に携わっているが、自らの役割について次のように語っている。

「いろいろなところにつないでいくのが一番大きな役割だと思う。」

Eは、「つなぐ」ことをもっとも重要な役割として、複言語サポーターとしての自分の仕事を位置づけている。当事者から来た相談を受け、当事者を外部の組織につなぐのが重要な役割だという。

また、生活相談を行っているCも、「電話相談では病院や労働局につなぐ役割を果たすことが大きい」と述べ、C自身が当事者と病院や労働局等の外部の機関と橋渡しをする役割を果たしていると述べている。EやCの述べるように、複言語サポーターは当事者を必要な組織へつなぐ「橋渡し」としての役割が重要な役割であるといえる。

Eは、さらに、日常的なつながりの大切さについても述べている。

「例えば、災害の講習会の時に、『何か特別なことをその時やるのではなくて、日常的な

つながりがあればその中で解決できる』と言われたが、日常的なつながりは何にしても大きい。」

Eは、災害時の講習会で、日常的なつながりの大切さについて学んだが、E自身も日常的なつながりの大切さについて実感していると語っている。日常的に人間関係の構築ができていれば、災害時においても、複言語サポーターの特別な「橋渡し」の役割を果たさなくとも、すでに出来上がっている関係性の中で問題解決が可能になるのである。日常的な関係構築の重要性についての語りである。

4.2 「言葉だけではなく文化の仲介をしている」という語り

言葉だけではなく、文化の仲介をしながら橋渡しをしているという語りも見られた。

学校で支援をしているDは、親と先生のコミュニケーションの橋渡しを以下のように行っていると述べている。

「先生が、子どもの態度について親に伝えてくれと依頼される。例えば、宿題をしてこないなど」「文化の違いで親がわかっていないことを説明する。」「親は、日本の方がペルーよりも宿題がないといっている。ペルーの方が宿題が多い。親から、もっと子どもに宿題を出してほしいといわれる。」

Dは、教師が「子どもの態度」について直接教師から親に伝えるのではなく複言語サポーターのDを介して伝えてほしいと依頼されているという。Dは、教師から「子どもの態度」を親に伝えるのに子どもの持つ文脈等を考慮しながら伝えることを期待されているといえる。また、Dは親から「宿題の量」が日本とペルーで異なるという学校文化の違いについて伝えられ、教師に学校文化の違いについて伝えるという役割も担っている。Dは母語と日本語を駆使しながら言語の通訳だけではなく文化の仲介も行いながら当事者間のコミュニケーションの橋渡しを行っているといえる。

また、学校で支援をしているOは、親、教師、生徒の三者懇談の際、保護者と教師の間の通訳をしているが、その時の状況を以下のように述べている。

「担任の先生に直接聞けないことを保護者が聞いてきて、自分が担任の代わりに聞いている。担任が保護者に聞いてほしいことを自分に聞いてくる。母国の文化のことを担任に説明している。」

保護者が担任の先生に直接聞けない内容について複言語サポーターのOを介して聞いているという。「担任に直接聞けない内容」であるためとOは述べているが、これは保護者が単に言語が通じないためにOを介しているのではなく、担任の先生には直接聞けない内容であるためにOに聞き、Oから担任の先生に聞いてもらっているという。Oは、そのまま内容を訳して伝える言語の仲介者という役割だけではなく、当事者の伝えたい内容を理解し、調整しつつ、子どもの文化的な背景も説明しながら必要なことを教師に伝えるサポート役という役割も期待されているといえる。また、担任が保護者に聞いてほしいことを直接保護者に聞くのではなくOを介して聞いてきているという。担任はOを介して伝えたいことを保護者に伝えていないと述べているが、これはOを介

すことによって文化的な背景の違いを理解しつつ伝えたい内容をよりわかりやすく保護者に伝えることができると担任が考えているためであろう。O は単なる言葉の通訳という役割だけではなく、担任や保護者をそれぞれとりまく文脈をよく理解している立場として捉えられていると言える。また母国の文化のことを担任に説明しているとO は述べているが、O は背景文化の説明をしていることがわかる。O は、言語だけではなく文化の仲介もしているといえる。

4.3 「信頼関係を構築している」という語り

当事者間の信頼関係を築く役割を果たしているという語りも見られた。

教育関係の組織で働いているO のコーワーカーであるS は、学校で支援している複言語サポーターについて次のように語っている。

「(複言語サポーターは) 学校とのパイプをつくってください。担任と保護者のパイプ役。信頼関係を築いてください。人と人のつながりをつくってください。パイプの役割は大きい。」

S は、「パイプ」という言葉を使って複言語サポーターの役割を語っている。S は、複言語サポーターは担任と保護者の「パイプ」であるという。そして、複言語サポーターが単に橋渡しをするだけではなく、担任と保護者間の信頼を築く役割を果たしていると述べている。つまり、橋渡しそのものが信頼関係の構築につながっていると捉えている。S の「パイプ」という言葉には、複言語サポーターが単なる言葉の橋渡しをしているのではなく、「信頼関係を築く」という役割を果たしているという意味がこめられている。O は、橋渡しをすることによって二者間の信頼関係を築く役割を果たしているといえる。

4.4 「摩擦のメディエータをしている」という語り

「橋渡し」は必ずしもスムーズにいく場合のみとは限らない。当事者同士、立場や意見が異なる場合や、誤解の生じる場合もある。

当事者間の異なる立場の狭間で複言語サポーター自身の位置づけが難しいという語りが見られた。学校で支援をしているP は、通訳の難しさについて以下のように語っている。

「学校と保護者の間を通訳するのは、難しい。お母さんお父さんの立場もありますので、学校にも意見とかあるし、子どもは真ん中で結構解決難しいと思います。」

P は、保護者の立場、学校の立場の違いの中で通訳することの難しさを述べている。通訳は単なる言語の橋渡しではなく、双方の異なる立場の間の「橋渡し」の役割も担わなくてはならない。両者の間の子どもの立場の難しさを語るとともに、両者の間の狭間に立つ複言語サポーター自身の立場の難しさや葛藤について語っている。当事者間の関係構築の橋渡しは単に言語の橋渡しを行うだけではなく、立場の異なる当事者間の狭間で双方の立場を理解し、解決していく力も求められているといえる。

当事者間の誤解を解消したという語りも見られた。学校で支援をしているY は、参

観日で親子間の誤解の解消のメディエータをしたことについて以下のように述べている。

「参観日の時に先生が子どもたちに親に向かって『ありがとう』と挨拶するよう指導して、子どもたちも『ありがとう』と言ったが、親は子どもが早く帰れるからよろこんでいると勘違いをしていた。(親に対して)『それは違うよ、お母さんが来たからよろこんでいるんだよ』と説明した。お母さんが見ていることと私が見ていることは違うんだね。お母さんは次の参観日行きましたね。」

Yによれば、参観日に教室で先生が子どもたちに向かって「ありがとう」と挨拶するように指導したのを、それを見ていた親が「子供が早く帰れるからお礼を言っている」と誤解していたという。Yは、「子どもたちは早く帰れるからよろこんでいるのではなく、親にきてもらったのでよろこんで感謝している」という意味を伝え、親の誤解を解消させたのである。Yは、メッセージを誤って解釈した親に対して、正しい解釈を示すことにより、子どものメッセージを正しく親に伝える役割を果たしたといえる。もしYの存在がなければ、子どものメッセージは誤って親に伝わり親は誤解したままになっていたであろう。Yは、子どもと親の間のメッセージの受け取り方の誤解を解消する役割を果たしたといえる。Yは、当事者間の言葉の橋渡しをしているのではなく、誤解の解消の生じた二者の関係を再構築しているといえる。

4.5 「状況に応じ役割を変化させる」という語り

状況に応じ役割を変化させながら橋渡しをしているという語りも見られた。

学校で支援をしているMは、教師、保護者、子どもの三者面談での支援について以下のように述べている。

「先生たちと本人と保護者の面会の時の通訳をする。その本人との面談のとき、その中で私とその本人と話して、この子大丈夫かどうか、そういうふうにも求められるんです。」

Mは、先生、本人、保護者の間の面談の際、当事者間の「通訳」の役割だけではなく、子どもの進学が大丈夫かという判断まで求められると語っている。Mの本来の役割は、言語の橋渡しである「通訳」である。しかし、面談という場を当事者と共有し、子どもの言語能力のみならず子どもを取り巻く様々な文脈を理解している者として、「進学について判断する者」としての役割も求められているといえる。Mは、当事者と場を共有している一人としてその場に関わることを求められ、自身の役割を変化させながら当事者間の関係構築の橋渡しを行っているといえる。

4.6 「ひとりで抱え込まず外につなげることの大切さ」についての語り

複言語サポーターが一人で孤立し抱え込むのではなく外につなげていくことの大切さに関する語りも見られた。

Nは、「領事館の番号を聞いてきたりする。わからないときは、市役所にまわしている。どこにいけばよいかという情報を伝えている」と述べている。Nは、わからない時

に抱え込まず、外部の機関に「橋渡し」しているという。外部への橋渡しは、複言語サポーター自身が解決できない場合にも、問題解決の糸口となっているといえる。

NのコーワーカーであるKは、複言語サポーターについて「一人で抱え込まないで、たとえばDVは市役所の女性支援課の方にまわすなど、抱え込まないことが大切」と語っている。複言語サポーターと協働で働く立場として、複言語サポーターの立場を客観的に捉えた発言である。Kは、複言語サポーターが一人で抱え込まずに他の組織等につなげていく（橋渡しをする）ことが重要であると述べている。

4.7 「サポーター同士の双方向的な連携の大切さ」についての語り

さらに、複言語サポーター同士の双方向的な連携の大切さについての語りも見られた。

生活相談の支援をしているEは、他のサポーターとの連携の大切さについて以下のように述べている。

「例えば、年金をとる方といっても大切なことだと思いますよね。県内の各市町村、ポルトガル語の相談員のいるところとか、あとハローワークとかの相談員とのつながりがあることによっては、向こうから相談も来ますし、ここからも相談にのってくれるから。とてもそういう連携が大切だと思います。」

「(他の複言語サポーターとは) お互いにとっても重要な役割ですから。向こうからも相談も来るし、こっちからもやっぱり近くにいるから、相談にのってくれるし。」「電話やメールで」「情報の共有もします」

Eは、他のサポーターとの連携について「向こうから」も「こっちから」も相談し、「お互いに」重要な役割であると述べている。連携が一方向ではなく、双方向であることの重要性について言及しているといえよう。また、こうしたサポーター同士の双方向的な連携が、当事者間の橋渡しの基礎になっているともいえる。この語りは、関係構築そのものが一方向的な関係では発展せず、双方向的な関係になって発展していくということを示唆している。また、「情報の共有もする」という語りが見られるように、他のサポーターとは連携だけではなく情報の共有をしていくことも双方にとって重要であると捉えていることがわかる。複言語サポーター同士によるこうした情報の共有が当事者間の橋渡しの基礎になるということができよう。

5. まとめ

以上、複言語サポーターの関係構築の「橋渡し」という点に焦点をあて、複言語サポーターと日本人コーワーカーへのインタビューをもとに考察を行った。

インタビューを分析した結果、複言語サポーターが、当事者間の関係構築の「橋渡し」を行う際に、極めて多様な役割を果たしていることが明らかになった。また、インタビューからは関係構築の「橋渡し」として重要な意味づけをしていることも明らかになった。インタビューイは、「つなぐ」という言葉や「パイプ」という言葉を用い

ながら、当事者間の関係構築の橋渡しの意味づけを行っていた。

まず、「関係構築」の「橋渡し」としての重要な役割を認識しているという語りが見られた。関係構築の橋渡しそのものを複言語サポーターの重要な仕事としてとらえていたことがわかる。関係構築には組織と組織、組織と個人等様々なレベルが考えられるが、複言語サポーターは、個人レベル、組織レベルの両方の関係構築にとって重要な役割を果たす可能性を持っているのではないかと考えられる。

次に、「言葉だけではなく文化の仲介もしている」という語りが見られた。複言語サポーターは複数の言語のみで関係構築の橋渡しをしているのではなく、文化の仲介もしながら関係構築の橋渡しをしていることが浮かび上がった。両方の当事者のそれぞれの文化について理解をしているという立場から、文化の仲介もすることで、当事者同士が関係構築していくための手がかりを与えているといえよう。

「橋渡し」が当事者間の信頼関係を構築しているという語りも見られた。関係構築の「橋渡し」は単に当事者間の関係を築くということのみではなく、当事者間の信頼関係を築くということにも意味があるという語りである。関係構築そのものの原点が信頼関係であることを示唆しているといえよう。

また、「状況に応じて自身の役割を変化させながら橋渡しをしている」という語りが見られた。一つの役割だけではなく、別の役割も担いながら、当事者間の関係を構築するための橋渡しの役割を果たしているといえる。固定的な役割にとどまるのではなく、文脈や状況に応じて自身の位置取りを変化させることでその役割を果たしているのである。その意味で、支援そのものは固定的な関係の中で行われるのではなく、動的な関係の中で行われているといえる。

「当事者間の摩擦を解消するメディエータの役割を担いながら橋渡しをしている」という語りも見られた。当事者間で、状況の把握の仕方や解釈の違いによる誤解が生じることがある。このような場合、解釈の違いであることを当事者に理解させるメディエータの存在がないと誤解は誤解のままで終わってしまう。複言語サポーターがメディエータの役割を果たすことにより、当事間の誤解が解消し、両者の関係を再構築することが可能になるといえる。

「仕事を抱え込まないことについての重要性」についての語りも見られた。複言語サポーターは、関係構築の「橋渡し」としての役割を果たしていると必要以上に仕事を抱え込んでしまう可能性がある。「わからないこと」「できないこと」については抱え込まず必要なところにつなげていくことが重要だという。その意味でも、複言語サポーターは日常から「つなげる」ことのできる場所や人を知っていることが重要であるといえるだろう。複言語サポーターの存在を「点」ではなく、他のサポーターや機関ともつながり「線」や「面」の中で仕事をしていくことが課題として挙げられよう。

さらに、「サポーター同士の双方向的な関係の大切さ」に関する語りも見られた。複言語サポーターは、当事者間の関係構築の「橋渡し」としての役割を果たしているが、

複言語サポーター同士の関係構築も重要である。語りにみられたように、二者の関係は一方的な関係ではなく、双方向的で相互に協力し合う関係が重要であるといえる。複言語サポーター同士が関係を相互に構築し協力し合うことで、複言語サポーターが一人で解決できなかった様々な問題が解決できるのではないかといえよう。

以上、複言語サポーターの語りを考察したが、それぞれの語りからは、複言語サポーターが単に言語のみの橋渡しをしているのではなく、文化の仲介や摩擦のメディエータなど、多様な役割を担いながら橋渡しをしているという状況が浮かび上がった。複言語サポーターは、複数の言語を駆使しながら文化の仲介や摩擦のメディエータをすることによって当事者間の関係の構築、再構築をサポートする役割を果たしているといえる。複言語サポーターの語りからは、常に「複言語サポーター」としての役割のみに固定しているのではなく、状況に応じて当事者の役割も担う等、自身の役割を変化させながら当事者間の関係構築の橋渡しをしているという状況もみられた。複言語サポーターの役割は常に固定しているとは限らず、状況に応じて役割を変化させながら当事者間の橋渡しができるのも、複言語サポーターが複数の言語を駆使することができることのできる立場であるからであろう。複言語サポーターは複数の言語を駆使しながら当事者でなければなし得ない様々な役割を担いながら当事者間の橋渡しを行っているといえる。当事者同士が関係を構築していくことは、コミュニケーションを行う上でまず基本となる重要なことであるが、実際、当事者同士の関係が構築されていないためにコミュニケーションがうまくいかない場合は多いのではないだろうか。しかし、複言語サポーターの介在によって当事者同士の関係が構築され、それをきっかけに両者のコミュニケーションが円滑にいくケースは多いのではないかと考えられる。

今回は日本国内における地域において活動している複言語サポーターを対象としたインタビューデータを分析したものであり、インタビュー対象は10名という点で一般化するには限界がある。しかし、インタビューから、複言語サポーターが、複数の言語の相互作用を通じ、当事者間の関係構築の「橋渡し」として重要な役割を果たしていることを示唆できるのではないかと考える。欧州評議会（2001）で提案された「複言語・複文化主義」を実現していくためには、複数の言語の相互作用を通じ当事者間の関係構築を支える複言語サポーターの存在が不可欠といえる。

今回の報告では、複言語サポーターが様々な役割を果たしながら当事者間の関係構築の「橋渡し」を行っていることを示唆できたが、どのような複言語能力が必要とされるのかまでは明らかにすることができなかった。これらは今後の課題としたいと考えている。

また、平高(2011, p104)は、ヨーロッパ評議会の示した仲介活動について「文字通りの複言語活動ができる人材、多言語状況で媒介活動ができる人材の養成や教育が必要になる。おそらく単なる通訳や翻訳者の養成だけではなく、言語使用者が相互に支援

し合うことのできるコミュニティーや仕組みのようなものを作っていかななくてはならない」と述べているが、このことも今後の課題となるだろう。

謝 辞

本研究を遂行するにあたり、インタビューに協力していただきました方々および学会発表等で貴重なご意見をくださった方々に心より感謝申し上げます。なお、本研究は、2011-2013年度科学研究費補助金（基盤C）「バイリンガルサポーターの支援における相互構築コミュニケーションに関する研究（代表 徳井厚子）の助成を受けて行ったものです。

文 献

- 晏晴（2002）．多文化共生事業における外国人職員の役割に関する考察—川口市の実践から—．*多言語多文化—実践と研究*, Vol.3, 86-101.
- 欧州評議会（2004）．*外国語の学習, 教授, 評価のためのヨーロッパ共通参照枠*.（吉島茂・大橋理枝他訳編）, 東京：朝日出版社. Council of Europe(2001). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 金井淑子（2010）．地域日本語教室における学習者の学び—日本語非母語話者ボランティアの参加をとおして—．*多言語多文化—実践と研究* Vol.3, 150-175.
- 徳井厚子 a（2012）．バイリンガルサポーターの支援のコミュニケーション—インタビュー調査から. *リュブリャーナ大学アジア・アフリカ研究学科第2回国際シンポジウム報告論文集*, 23-27.
- 徳井厚子 b（2013）．複言語サポーターの「支援についての語り」にみるアイデンティティ—ポジショニング理論から．（細川英雄・鄭京姫編）*私はどのような教育実践をめざすのか—言語教育とアイデンティティ*, 横浜：春風社, 51-71.
- 西山教行（2010）．複言語・複文化主義の形成と展開 , *複言語・複文化主義とは何か—ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ*.（細川英雄・西山教行編）くろしお出版, 22-34.
- 野山広（2003）．地域ネットワークと異文化間教育. *異文化間教育*, 18, 4-13.
- 平高史也(2011)．CEFR から見た育成すべき言語能力とは何か. *早稲田大学日本語教育学*, 9.99-106.
- 水野真木子（2008）．*コミュニティ通訳入門*. 大阪教育図書.
- 山本志都（2011）．*異文化間協働におけるコミュニケーション—相互作用の学習体験化および組織と個人の影響の実証的研究*. 京都：ナカニシヤ出版.

(2013年11月28日 受付)

(2014年 2月13日 受理)